

## やらかしちまった

福島 義也

奨励者紹介〔ふくしま・よしや〕

日本キリスト教団河内長野みぎわ教会牧師

人々はイエスを捕らえ、引いて行き、大祭司の家に連れて入った。ペトロは遠く離れて従った。人々が屋敷の中庭の中央に火をたいて、一緒に座っていたので、ペトロも中に混じって腰を下ろした。するとある女中が、ペトロがたき火に照らされて座っているのを目にして、じっと見つめ、「この人も一緒にいました」と言った。しかし、ペトロはそれを打ち消して、「わたしはあの人を知らない」と言った。少したってから、ほかの人がペトロを見て、「お前もあの連中の仲間だ」と言うと、ペトロは、「いや、そうではない」と言った。一時間ほどたつと、また別の人が、「確かにこの人も一緒だった。ガリラヤの者だから」と言い張った。だが、ペトロは、「あなたの言うことは分からない」と言った。まだこう言い終わらないうちに、突然鶏が鳴いた。主は振り向いてペトロを見つめられた。ペトロは、「今日、鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」と言われた主の言葉を思い出した。そして外に出て、激しく泣いた。

(ルカによる福音書 22章 54—62節)

### 大学に入るまで

私には夢があります。子どもの頃からずっと抱き続けてきた夢です。それは、バスの運転手さんになるということです。物心ついた時から、私のあこがれはバスの運転手さんでした。小学生の頃も、中学生、高校生になっても、その気持ちは変わりませんでした。今でも変わりません。けれども、大学には行きたいと思っていました。心理学を勉強したくて、大学に入って心理学を学び、その間に大型二種免許を取って、大学を卒業したらバスの運転手さんになろうと思っていました。そして、高校三年生の時に大学を受験するのですが、不合格となりました。そこから私はいろいろとやらかしていくことになります。大学受験に失敗したので、予備校に通うことになりました。一浪目の六月に彼女ができました。暗くなりがちな浪人生活がちょっと明るくなるかと思えた出来事でした。けれども、その彼女に対して猛アタックしてくる男が現れました。それからというもの、その男に彼女を取られないように必死で過ごす毎日となりました。あっという間に一年が過ぎ、私は完全なる勉強不足でまた受験に失敗します。ちなみに彼女ともう一人の男は合格して大学生となりました。その彼女と別れ、私は二浪目に入りました。予備校二年目になると、二浪以上の人たちのグループができます。その中にいた、同い年の女の子と私は付き合うことになりました。その彼女が後に結婚する人でした。一緒に勉強を頑張ろうと思えばよかったのですが、一緒に楽しく過ごしてしまいました。あっという間に受験期がやってきて、また落ちました。彼女も落ちました。二人で予備校三年目です。その年、二人で考えて、実家を離れ東京の大学を目指すことにしました。その方が自由に二人で楽しめそうだったからですが、理由はどうあれ目標ができると勉強も少しは頑張ります。成績はみるみる上がりました。そして迎えた大学受験。なぜかまた落ちました。彼女は見事合格しました。一緒に大学に行くはずが、彼女だけが東京に行き、私は地元の福岡に残ることになりました。そして四浪目です。次の年には絶対に東京の大学に合格しなければなりません。四浪目の人間には誰も近づいてきませんから、

私は勉強に集中することができました。東京の大学をいろいろと調べていると、心理学を学ぶことができ、偏差値がけっこう低くて、私でも入ることができそうな大学を見つけました。それが、東京神学大学という大学でした。受験資格などを調べていると、クリスチャンになって一年以上が経過していて、所属教会の牧師の推薦が必要とありました。そこで牧師先生に推薦してくださいとお願いに行きました。なんの前触れもなく、私が東京神学大学を受けたいので推薦してくれと言いに来たので、牧師先生は非常に驚いておられました。そして、どうしてそこに行きたいのか聞かれました。私は正直に言いました。バスの運転手になりたいこと、大学では心理学を勉強したいこと、彼女が東京で待ってくれているので何がなんでも東京の大学に行かなければならないこと。その牧師先生はしばらく考えて、「わかった、推薦しよう」と言ってくださいました。ただし、二つのことをしっかりと覚えておきなさい、と言われました。一つは、受験の面接の時、絶対にバスの運転手になりたいことを言うてはいけない。もう一つは、答えに困った時には「神様の御心のままに」と答える。私はよく分からないまま「分かりました」と言うと、牧師先生はにっこりと笑われました。

いよいよ受験の日がやってきて、筆記試験の後、面接が行われました。私は牧師先生に言われた通り、二つのことを守りました。すると、ようやく合格することができたのです。他の大学も受けましたが、すべて落ちました。けれども、私は晴れて東京で大学生活を始めることができるようになったのです。

### 大学時代に気付いたこと

私は東京神学大学の寮に入りました。新入生たちを集めて先輩たちが歓迎会をしてくれました。鍋を囲みながら、先輩たちが新入生たちに順番に質問をされるのですが、その質問内容にびっくりすることになります。なぜなら、一人ひとりに「君はどうして牧師になろうと思ったの」というところから質問が始まるからです。それに対して新入生もすらすらと答えています。そこで私は、この大学がみんな牧師になるために入る大学なのだと知ったのです。そして、なぜバスの運転手になりたいと言っではいけないか、その理由をそこで知ったのです。やがて先輩からの質問が私に向けられる時が来ました。「福島君はどうして牧師になろうと思ったの」私は答えました。「神様の御心のままに」。

そうやって私の大学生活が始まったのですが、そこで学んでいくうちに私の中で変化が生まれてきました。牧師という仕事もいいな、という気持ちが芽生えてきたのです。自分でも驚きでした。大学に入るまでの私は、とんでもない生活をしていました。たくさん悪いこともしました。大学に入ったことで、真面目になったかという、決してそうではありませんでした。相変わらずめちゃくちゃな生活をしていました。そんな自分が、牧師になんてなれるわけがない、なったらいけない、そう思っていました。けれども、牧師っていいな、とも思い始めているのです。ふとそれまでの自分の歩みをふり返ってみました。人には恥ずかしくて言えないようなことばかりでした。自分で望んでやってきたわけでもありませんでしたし、思い通りにならないことばかりでした。でも、その望んでいない道を歩み、四年も浪人して、東京に出てきて、牧師になる人ばかりの大学に入り、今牧師もいいなと思いつけている、どれも自分の力ではない何かに導かれてきたように思えたのです。それは、神様の導きだとしか思えませんでした。別に立派になったわけでもなく、真面目になったわけでもなく、相変わらずいい加減な人間である私に、「ありのままの姿でいいからとりあえずここにいなさい」と神様は居場所を作ってくくださったのです。そう思った時、私は神様にお任せして、

牧師になるしかないなど決心しました。

それによって私の生活が変わったわけでもありません。大学院二年の時のことです。二つの大きな事件が起こりました。ケイドロ事件と送別会事件という二つです。ある日私は授業をさぼって後輩たちと学内でケイドロをしていました。みんなけっこう本気でやるので、私も負けじと校内に停まっていた車の下に隠れました。そして見事隠れ通して、チャイムがなったので車の下から這い出すと、目の前に誰かの足が見えました。腹ばいのまま顔を上に向けると、その車の持ち主である、私の修士論文の指導教授でした。「福島さん、何をしていますか」と聞かれ、私は「隠れておりました」と答えることしかできませんでした。その事件から数カ月が過ぎ、いよいよ明日が最後の授業という日を過ごしておりました。するとその日の夜、後輩たちが私の送別会をしてくれるというのです。最後の授業の前日ではありましたが、後輩たちの気持ちがうれしくて、私は夜の街へと出かけていきました。楽しい時間を過ごし、寮の部屋に帰って来たのは翌朝六時。あと二時間半で授業が始まるので、テレビでも観ていようとスイッチを入れたところまでしか記憶がありません。気付いたら昼過ぎでした。そうやって私は最後の授業をさぼることになったのです。そんな私は大学院の単位も取ったのですが、実は成績が足りなくて修士号をもらっていないのです。どのくらい成績が足りなかったかという、授業の出席回数で言うと、あと一回分足りなかったのです。

こんな私が牧師になって大丈夫なのか、と教授や学生たちは思っていたことだろうと思いますが、一番思っていたのは私自身だったと思います。「神様、本気ですか」と何度も祈りました。けれども私の心配とは裏腹に、赴任地が決まり、その話が進んでいくのです。一緒に卒業する同級生たちがとても立派に見えました。自分は全然立派じゃないのに、と感じていました。でもあとで気付かされたのですが、そんなふうに感じていたということは、立派にならなきゃいけない、とどこかで思っていたのだと思います。牧師になるんだから、神様の御言葉を人々に語るんだから、教会に赴任してそこに集われる皆さんを導くんだから、立派じゃないといけないと思っていたようです。でも、浪人時代、大学時代をふり返ってみて、立派になるように導かれたのではなく、どれだけ自分が小さく愚かで弱いダメな人間であるかを嫌というほど知らされたのだと思いました。自分では何もできない私です。だから、神様にすぎるしかないんです。とことんダメだということを知らされることで、神様にすぎるしかないことを教えられたのだと思いました。

### これからもやらかしながら

今日の聖書に出てきたペトロもそうでした。彼はイエスの弟子の中でいつも一番であろう、立派であろうとしていました。命がけてイエスについて行くのは自分だと思っていました。でも、いざ命の危険にさらされた時、彼はイエスのことを三度も知らないと言うのです。弱くてダメな自分を徹底的に知らされた瞬間でした。だからこそ、彼は自分の力ではなく、自分の知恵でもなく、神様にすべてを委ねて歩いていくしかないと思ったのです。

何かをやらかしてしまった時、ダメな自分を突き付けられて落ち込むと思います。もう自分は立ち直れない、立ち上がれないと思うこともあるかもしれませんが、自分の力で立ち直れなくても、立ち上がれなくても、イエスが手を差し伸べてくださいます。立派じゃない、そんなダメダメなありのままのあなたを、神様は愛してくださっているし、あなたじゃないといけない場面で必要としてくれますよ、と寄り添ってくださいます。私も牧師になってからも何度もやらかしましたが、どうにか二十年イエスに守られてやってきました。

でも、もう牧師は終わりだと言われれば、そこでバスの運転手の夢を叶えようと思っています。皆さんの歩みイエスに導かれて、たくさんやさしくしながら、でもその度に神様の愛を感じながらの歩みでありますように、祈っています。

2022年7月 20 日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録